様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１５３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５３１０９５

研究課題名（和文）保育者の「実践の質保証」とアイデンティティ形成に関する長期縦断研究

研究課題名（英文）A Long-term Longitudinal Study on Childcare Workers' Identity Formation: For the Quality Ensuring of Practice

研究代表者
西山　修（NISHIYAMA, Osamu）

岡山大学・教育学研究科（研究院）・教授

研究者番号：５０３１０８５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：子どもの社会的発達を援助することは、保育者の重要な役割の１つである。保育者には、専門的知識・技能の修得に加えて、保育者自身の自我の成長発達を促すための養成と支援が不可欠と言える。これにより、保育実践の質が保証される。そこで本研究では、養成期から初任期を経て、中堅期に至る長期縦断的調査により、まず、保育者固有のアイデンティティの形成過程を検討した。次に、アイデンティティ形成と領域「人間関係」に係る効力感など他の要因との関連を検討した。さらに、これらを踏まえ、保育者のアイデンティティ形成を志向した支援の在り方等を提案することを目指した。

研究成果の概要（英文）：One of the significant tasks of childcare workers is to assist children in their social development. In addition to acquiring expert knowledge/skills, the facilitation of training and support for promoting the self-development of childcare workers is indispensable. Such measures will then guarantee the quality of their childcare practice. Thus, this study first examines the formation process of the identities specific to childcare workers through a long-term longitudinal survey spanning the training stage, the first posting stage, and the veteran stage. Next, the relationship between identity formation and other factors, including the sense of efficacy related to the childcare content “human relationships”, is examined. Based on the findings, this study aims to propose the ideal way of assistance oriented towards the formation of childcare workers' identities.

研究分野：幼児教育学、発達心理学

キーワード：保育者　実践の質保証　アイデンティティ　縦断研究

１．研究開始当初の背景

(1) 近年、世界の潮流は幼児教育・保育の振興にあり、その担い手（保育者）の実践の質保証やその支援に関心が高まっている（e.g., OECD, 2001；厚労省, 2010）。しかしながら、経済優先の社会情勢の中、我が国の幼児教育・保育は市場原理の導入と効率化に傾斜していると言わざるを得ない。安い労働力が歓迎され、経験者の減少により豊かな保育実践の継承が困難になっている。また、業務の拡大や多様化から保育者の疲弊感が増大しているとの指摘もある（厚労省, 2010）。保育者の実践の質を高め維持することが、子どもの健やかな育ちを保証する。今や実践の質保証は危機的な状況にある。

(2) Erikson（1950）によってアイデンティティ（以下、自我同一性）の概念が提示されて以来、膨大な研究がなされてきた。また自我同一性形成は青年期に完了するものではなく、様々な関係性の中で、それ以降も危機と再統合が続くものと捉えられてきた。本研究は Erikson のいうⅤ期（青年期）からⅥ期（成人前期）に至る保育者を対象に、自我同一性形成を専門性の形成を含めた次元へと広げ検討する。このように、ある専門職に焦点化し、長期に渡る大量データを検討した自我同一性研究は皆無に等しく、本研究はその先駆に位置する。

(3) 養成期から初任、中堅、熟練期に至る教師・保育者の成長過程に関する横断研究（e.g., Berliner, 1988；1994；高濱, 2001）からは、総じて初任期の困難さが指摘されている。初任者の早期離転職も問題化している。またそもそも免許・資格を取得しながら保育職に就かない者も多い。近年の研究は、従来考えられていたよりも子どもの発達に果たす保育者の役割が大きいことを示している（e.g., Howes et al., 1994）。優れた保育者を養成、輩出し、その後の保育者としての成長を支えることが実践の質保証には不可欠である。青年後期から成人前期は、職業選択・適応、親密な他者との関係構築など、心理社会的な発達課題と重なる時期でもある。この困難な時期への具体的な支援を考える必要がある。

２．研究の目的

筆者はこれまでに、基礎研究（若手研究(B)等を含む）を継続し、養成期では一定の成果を得てきた。その上で、実質的に保育者の成長を支援し、実践の質保証を図るためには、自我同一性形成過程の長期縦断研究が不可欠との着意に至った。特に本研究は、保育者志望学生及び現職保育者への横断研究（西山, 2006b；2008）を発展させ、自我同一性研究上も、実践研究上も、乗算的な成果を導く。

既述の基礎研究の成果や当該研究分野の動向などを踏まえ、本研究の目的を次のように設定した。先ず、養成期から初任期、中堅期に至る保育者固有の自我同一性形成過程を検討する。次に、自我同一性形成と領域「人間関係」に係る効力感など他の諸要因との関連を明らかにする。さらに、保育者の自我同一性形成を志向した支援の在り方等を提示する。

３．研究の方法

(1) 本研究は、2002 年から実施された保育者志望学生に対する大規模な調査データを有効活用し、自我同一性形成に関する長期縦断調査を中心に展開された。対象は、保育者養成校４校に在学する保育者志望学生（卒業後の現職保育者等を含む）約 1,450 名であった。この中から、研究目的に沿った被調査者を各研究の分析対象としている。具体的な方法には主に、郵送による質問紙法、半構造化面接等を用いた。また、分析方法は研究目的に合わせて、テキストマイニング、共分散構造分析等を援用した。

(2) 本研究では、フェーズ毎の到達目標を設定し、始期・終期を明確にした計画により、研究を推進した。フェーズ毎の主な内容及び方法は次の通りである。

①プレフェーズ：縦断データの内、養成校入学時、進級時、卒業時、就職後１年は収集済みであった。これらの被調査者には継続調査の内諾を得た。卒業から数年後のデータ（成人期の中堅保育者他）を収集すべく、具体的な実施計画を策定し準備を進めた。また、指導助言の協力を得た学外研究者らと十分な事前協議を行い、実施計画の確認を行った。

②フェーズ１：交付申請時には再度事前協議の場を設けた。縦断データの収集（郵送による質問紙法）を開始した。2002 年から実施の調査は、様々な分析に耐え得る大量データを収集するため、３養成校（最終年度は４養成校）に依頼し、年次をずらしながら３年間かけて実施している。よって今回の調査も完了までには３年間を要した。縦断データはデータベース化し、広く利用可能な形で整理を進めた。

③フェーズ２：縦断データ収集、整理を継続した。主に保育者の自我同一性形成過程を明らかにし、領域「人間関係」に係る効力感など他要因との関連を解明した。査読などを通してフィードバックされた反応や意見は、次年度以降での課題の明確化や研究計画の部分的修正のために役立てた。また、これまでの進捗状況と研究成果について第三者から評価を受けた。保育実践者、諸分野の研究者らに順次結果を公表し、研究への評価やフィードバックを仰ぎ、質的な向上を図った。

④フェーズ３：全ての縦断データが収集・整理されたところで、共分散構造分析等を適用した解析を試みた。個人差を織り込んだ発達

データの分析も推進した。足立・柴崎(2009)、西山(2006b；2008)の現職保育者を対象とした大規模横断研究の結果と比較しつつ考察した。最終期にあたるこのフェーズでは、保育者の自我同一性形成を志向した、支援の在り方等を提示することに注力した。主に量的分析から明らかにする保育者の成長過程と、主に質的分析から明らかにする自我同一性の危機体験の内容等を検討し、これに沿った支援の在り方を提示した。

４．研究成果

以下、主な研究成果の要約を報告する。

(1) 先ず、養成期から初任期に至る保育者の自我同一性形成に関する、縦断データの分析を進めた。この内、養成期については、進級時における学生の自我同一性と職業認知の構造等を検討した。具体的には、同一性の感覚と職業認知に関する諸変数の因果モデルを構成し、その妥当性の検証と部分的評価を通して、自我同一性と職業認知の構造を明らかにした。その結果、第１に、「保育職の適性感」は職業認知に関わるさまざまな変数を強く規定していた。「充実感・満足感の予期」といった将来の見通しや、「関心・興味」といった動機付けの側面、さらには「継続の意思・重要さ」に強い正の影響を与えていた。第２に、その「保育職の適性感」を強く規定しているのが「同一性の感覚」及び「保育職の理解」であった。自我同一性の形成の有り様が、保育職の理解や職業への相応しさの感覚と結び付いていた。自我同一性の形成が、職業認知の基盤となる。第３に、進級時の特徴として、「保育職の理解」が「保育職への傾倒」を強く規定している。入学期、卒業期にみられる「保育職の適性感」から「保育職への傾倒」へのパスはない。しかしながら第４に、進級期の構造は、入学期・卒業期と類似しており、因果関係について概ね同じ流れを想定してよいと思われる。このことから、保育者養成校において、この因果モデルを想定することの有効性が改めて示されたと言える。

これらの点から、保育者志望学生の自我同一性と職業認知に関する支援を考えていく上で、次のことを指摘できる。先ず、自我形成と職業認知には深い関係があることが改めて明示されたことから、自我同一性を育むという視点が、今後益々必要であることが示唆された。次に、「保育職の適性感」を育むことが１つの焦点と言える。適性感は相応しさに関する感覚であることから、保育職の理解と自己理解との擦り合わせによって生まれる。「保育職の適性感」を育むことは、養成校における既存のカリキュラムや教科目の中にも比較的位置付けやすいと言える。保育に関わる学習と自己理解を有機的に結び付けた教育的働きかけが、様々な機会を捉えて実施されることが望まれる。

(2) 次に、中堅期に至る保育者の自我同一性形成に関する検討を進めた。この内、中堅保育者の自我同一性と保育職への意識との関係を主にテキストマイニングを用いて分析したところ、両者に深い関係が示された。すなわち、総じて自我形成の十分な中堅保育者は、積極的な保育実践へ意識を持つのに対して、自我形成の不十分な者は、保育以外に目が向く傾向や自分の適性への疑いが示された。こうした保育職への意識の相違は、役割や責任が一層増す成人期後期に向けた、保育者としての成長にも影響を及ぼすものと推察される。

足立・柴崎（2010）は、中堅期を人生としての転換期（結婚や出産）と重なると指摘した上で、以下の６つの事柄が問題や落ち込み（揺らぎ）を生起させるとしている。すなわち、「業務の多忙さ」「プライベートとの両立の難しさ」「自分が理想とする保育と社会が求める保育内容や園が求める保育内容とのギャップ」「身体的・体力的・精神的な辛さ」「職場の人間関係への戸惑い」、及び「社会的地位の低さ」である。これらは本研究の中でも多く記述され、中堅保育者の特徴を示すことが確認された。加えて、因果関係は不明にせよ、現在の自我同一性の状態が保育職への意識と明確な関連が示された。ほぼ同じ保育経験年数を積み重ねてきた中堅保育者であっても、保育職への意識とともに自我形成の状態は相当異なる。充実した保育職への従事において、中堅保育者であっても個々の自我形成や心的成長を考える必要性が示されたと言えよう。

(3) さらに、自我同一性形成に関わる関連要因を検討した。この内、保育職への適性感、及び保育職へのコミットメント（以下、傾倒）の結果は次の通りであった。

①保育者志望学生にとって「保育職の適性感」は、保育職への関心・意欲、及び傾倒などに影響を与える、主要な決定因である。本研究では、保育者志望学生の「保育職の適性感」に焦点を当て、入学期から卒業期に至る因果関係を実証的に示し、「同一性の感覚」との関連も含め共分散構造分析による検討を試みた。その結果、入学期の保育職の適性感は、卒業期のそれに比較的高い正の影響を与え、このいずれにも入学期の同一性の感覚が正の影響を与えていることが明らかとなった。保育者養成における自我形成の重要性と、「保育職の適性感」に焦点を当てた支援の必要性が示された。

②職業への傾倒は職業を得ることに影響を与える、主要な決定因である。本研究では、この職業への傾倒に焦点を当て、保育者養成校への入学期から卒業期に至る因果関係を実証的に示した。具体的には、保育職への傾倒を縦断的に測定し、保育職の適性感との関連も含め共分散構造分析による検討を試み

た。その結果、入学期の保育職への傾倒は、卒業期のそれに高い正の影響を及ぼし、このいずれにも入学期の保育職の適性感が正の影響を及ぼしていることが明らかとなった。養成期を通じて保育職への傾倒は比較的安定しており、保育職の適性感が影響を及ぼしている。

(4) 支援の在り方等を提案した。この内、保育者支援プログラム（西山, 2009）を援用した、初任期における個別支援、及び免許状更新講習における簡易実施の結果は次の通りである。

①就職直後の初任保育者を対象に、支援プログラムを個別実施し、保育者の自我同一性と効力感の変化を中心に検討した。支援プログラム参加者は、就職直後の初任保育者４名であった。支援プログラムの効果を検討するために、卒業直前、実施前、実施中、実施後、追跡、及び卒後１年の各時に、質問票への回答を求めた。合わせて参加保育者の記述や半構造的な面接から得られた、初任初期の保育者を取り巻く状況を提示し考察を加えた。その結果、支援プログラムの明確な効果が見出された。本支援プログラムは、多様な状況におかれた初任保育者への個別実施においても、見通しや自信を高めることが可能であった。また、効力感の向上により自我同一性形成を促すことも期待できる。このことは、本支援プログラムの初任初期への適用可能性の高さを示すものと言える。

ただし、次の点は課題と言える。第１の課題は、新任保育者特有の多忙への対処である。今回の参加保育者への面接からは、日々の多忙さとそれに伴う疲弊感を殆どの保育者が吐露した。この中には、園内での研修が却って本人を追い詰めているケースもあった。これに関連して第２の課題は、支援プログラムの実施時期の検討である。水野・徳田（2008）によれば、就職から３か月までに、仕事を辞めたいと思ったことがある初任保育者は60%に上る。初任保育者への支援としてどの時期が最も相応しいか、十分検討する必要がある。

②免許状更新講習に参加した現職保育者を対象に、保育者支援プログラムの簡易実施の効果を検討した。本支援プログラムは、尺度を活用した診断的評価、適切な目標設定、及び自己観察等により、子どもの育ちに望ましい変化を与えることができるという、保育者の実現可能性の認知を肯定的な方向に変え、保育実践の質的向上を目指すものである。西山（2009）では既に、本支援プログラムが保育者効力感や同一性の感覚の変化に有効であることが実証されているが、その効果は免許状更新講習のような一時的な集団における部分的実施によっても見られるか、様々な観点から検証した。その結果、研修を半分に割愛した簡易な実施にもかかわらず、本支援プログラムは、保育者効力感の向上に有効であることなどが明示された。他方、同一性の感覚には変化がなく、今回割愛した部分である、振り返りや共有の活動の意味を中心に、考察を加えた。

(5) 今後の発展的研究への課題が明確化された。主な内容は次の通りである。

先ず、縦断データの欠損値への対応である。これには当初から、対応の必要性が予想されていたが、長期にわたる縦断的調査のため、想定より多くの欠損が見られた。これを補う統計的手法等を取り入れる必要がある。

次に、新しい質的な分析方法の導入が必要である。今回は、自由記述及び一部面接について質的分析を試みたが、全データを十分分析したとは言い難い。客観性や実証性を保った大量データの質的分析のために、新たな方法の援用や開発が求められる。

初任期から中堅期にかけての保育経験の蓄積が、中堅保育者の自我状態や保育職の意識に影響を与えていると考えられる。他方、同じような経験であっても個々の保育者がどのようにそれを受け止め、個人の自伝的記憶としてどのように蓄積されたかという視点も重要である。個人の認知を含めて、縦断的データから検討することは、今後の課題である。

＜引用文献＞

① 足立 里美、柴崎 正行、保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討：担任保育者に焦点をあてて、保育学研究、Vol.48、213-224　他

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

① 西山 修、吉田 満穂、片山 美香、中堅保育者におけるアイデンティティ地位からみた保育職への意識の相違、岡山大学大学院教育学研究科研究集録、査読無、No.158、2015、27-34
② 西山 修、免許状更新講習における保育者支援プログラムの簡易実施とその効果、応用教育心理学研究、査読有、Vol.30、No.2、2013、3-13
③ 西山 修、保育者志望学生における保育職の適性感の変化、応用教育心理学研究、査読有、Vol.30、No.1、2013、3-11
④ 西山 修、家庭からの巣立ち期における職業へのコミットメントの変化―保育職について―、家庭教育研究、査読有、No.18、2013、15-22
⑤ 西山 修、片山 美香、初任初期における保育者支援プログラムの個別実施とその効果、岡山大学大学院教育学研究科研究集録、査読無、No.152、2013、1-9
⑥ 西山 修、片山 美香、岡山 万里、保育者養成校の学生における進級時のアイデン

ティティと職業認知の構造、岡山大学大学院教育学研究科研究集録、査読無、No.151、2012、51-58

６．研究組織

(1)研究代表者

西山　修（NISHIYAMA, Osamu）
岡山大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：　５０３１０８５０